

①事業名 (事業評価実施年度)	【1】ナショナルバイオリソースプロジェクト(ラット・ショウジョウバエ)
②主管課及び関係課(課長名)	(主管課) 研究振興局ライフサイエンス課(課長: 佐伯 浩治)
③施策目標及び達成目標	<p>施策目標4-2 ライフサイエンス分野の研究開発の重点的推進          達成目標4-2-6 ライフサイエンス研究に必要な不可欠な研究基盤を整備する。</p> <p>(関連)          施策目標5-3 科学技術振興のための基盤の整備          達成目標5-3-1 2010年を目途に、知的基盤整備計画(科学技術・学術審議会阿部前会長より遠山大臣に平成13年8月30日に答申)に記載された重点的に整備する知的基盤(①研究用材料(微生物等の生物遺伝資源等)、②計量標準、③計測方法・機器等、④データベース)の整備について、⑥の指標に示されているような整備目標を達成する。</p>
④事業の概要	<p>ライフサイエンス研究の基盤となる生物遺伝資源(バイオリソース)及びそのゲノム情報については、国の戦略的な目標に基づき、体系的な開発・収集・保存・提供を行う体制の整備確立を図る。</p> <p>具体的には、生物種等の対象ごとに拠点を整備するとともに、バイオリソースの所在情報や各リソースの遺伝情報等を提供する。</p> <p>これらにより、「国が重点的かつ主体的に整備すべきバイオリソースについては、2010年時点で世界最高水準の目標に達する」という戦略的な目標を視野に入れつつ、平成18年度における保存数・提供数を設定し、年次計画に基づき、各リソースの体系的な整備を行う。</p>
⑤予算総額及び事業開始年度	平成18年度概算要求額: 400百万円(平成17年度予算額: 400百万円) 事業開始年度: 平成17年度
事業開始時又は事前評価時において得ようとした効果	「国が重点的かつ主体的に整備すべきバイオリソースについては、2010年時点で世界最高水準の目標に達する」という戦略的な目標を視野に入れつつ、平成18年度における開発・保存数・提供数を設定し、年次計画に基づき、各リソースの体系的な整備を行う。
⑥得られた効果(波及効果を含む)及び得ようとした効果との比較・検討	<p>平成16年度においては、実施機関における体制の整備も進み、生物遺伝資源の収集・提供は着実に実施されている。</p> <p>また、これらの提供されたリソースを利用した研究も推進されており、ライフサイエンス研究の戦略的・重点的な推進に資している。</p> <p>具体的には、ラット目標保存系統数260系統に対し446系統、目標提供系統数155系統に対し250系統。ショウジョウバエ目標保存系統数23,671系統数に対して24,130系統、目標提供系統数8,450系統に対して16,037系統。</p>
評価 効率性	<p>【事業に投入されるインプット(資源量)】          ラットの拠点とショウジョウバエの拠点(各1)に対し、平成14年度以降、約8.2億円の予算を投入。</p> <p>【事業から得られるアウトプット(活動量)】          平成17年5月末現在、          ラット目標保存系統数260系統に対し446系統、目標提供系統数155系統に対し250系統。ショウジョウバエ目標保存系統数23,671系統数に対して24,130系統、目標提供系統数8,450系統に対して16,037系統。</p> <p>当初の目標よりも、より効率的な整備がなされている。</p> <p>また、バイオリソースについては、「科学技術基本計画」(平成13年3月閣議決定)の具体的な推進方策を示した「分野別推進戦略」(平成13年9月総合科学技術会議)において、生物遺伝資源の収集、供給等の機能は、長期間にわたり継続することが必要であり、国家として対応することが必要であるという観点から、継続的かつ効率的に事業を実施している。</p>
有効性	バイオリソースの開発・収集・保存・提供等を行いつつ、バイオリソースの質・量の

<p>：（上位目標の達成に貢献したか）</p>	<p>向上を図ることは、実験結果の再現性や定量性を確保し、ライフサイエンスの発展に寄与するものである。その意味で、ナショナルバイオリソースプロジェクトを通じて、国として戦略的に整備すべき種のバイオリソースについて、体系的に開発・収集・保存・提供することが可能になったことにより、ライフサイエンス研究推進にとっては、非常に大きな効果があったと考えられる。</p> <p>なお、平成18年度に本事業を達成することにより、2010年時点で世界最高水準の質と量を目標にしたバイオリソースの体系的な開発・収集、保存、提供するため体制整備への一層の貢献が期待される。</p>	
<p>評価結果</p>	<p>目標提供系統数に対して、いずれも達成していることから、概ね順調に進捗。</p>	
<p>⑦ 評価に用いたデータ・情報・外部評価等</p>	<p>各リソースの主なユーザーである国内研究者等外部有識者から構成される委員会において研究ニーズや各リソースの個別事情を勘案して設定された、平成18年度における開発・収集・保存・提供数の目標値に向けた年次計画の実現状況。</p> <p>プロジェクトに設置している評価委員会が年度ごとに行う進捗状況評価結果（S, A, B, C, Dの5段階評価）。</p>	
<p>⑧ 今後の政策への反映方針（継続の適否、改善点を含む）</p>	<p>リソースの収集については順調に進捗しているが、さらに系統的、体系的に収集するとともに、利用者からの意見の反映等を通じて、ニーズに合った高品質のリソースの収集・提供を目指すことが必要。また、ライフサイエンス研究に必要な研究基盤としての位置づけを踏まえ、プロジェクト期間終了後の体制についても検討が必要。</p>	
<p>⑨ 得ようとする効果</p>	<p>平成18年度は</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ラット 保存系統数405系統（累積数） 提供系統数100系統（単年度）</li> <li>・ ショウジョウバエ 保存提供数36,300系統 提供系統数16,100系統</li> </ul> <p>を目標として、生物遺伝資源を体系的に開発・収集・提供・保存する体制を確立する。</p> <p>これにより、2010年時点で世界最高水準の質と量を目標にしたバイオリソースの体系的な開発、収集、保存、提供するための体制整備が推進される。</p>	<p>⑩ 達成年度</p> <p>平成18年度</p>
<p>⑪ 備考</p>	<p>我が国の科学技術政策の基本的な方向性を定めた「科学技術基本計画」（平成13年3月閣議決定）において、生物遺伝資源を含む知的基盤の重要性が指摘され、同計画の具体的な推進方策を示した「分野別推進戦略」（平成13年9月総合科学技術会議）において、生物遺伝資源の収集、供給等の機能は、長期間にわたり継続することが必要であり、国家として対応することが必要であることが指摘された。このような指摘を踏まえ、知的基盤整備計画（平成13年8月科学技術・学術審議会答申）において、我が国における生物遺伝資源が欧米と比較し、質については遜色ないものの、量に関しては大きく遅れている現状を踏まえ、「国が重点的かつ主体的に整備すべきバイオリソースについては、2010年時点で世界最高水準の目標を達成する」ことが提示された。これにより、同方針に基づき、平成14年度より「ナショナルバイオリソースプロジェクト」が開始された。</p> <p>対象となるバイオリソースとは、研究開発のための材料として用いられる集団、生物系統、個体、組織、細胞、DNA、さらにはそれらから生み出された情報である。「リソースなしに研究はない」ことは明白であり、我が国のライフサイエンス研究開発を進展させるには、その基盤となるバイオリソース事業の充実を図る必要がある。</p> <p>本プロジェクトは、平成14年度～平成16年度は、「ナショナルバイオリソースプロジェクト」の一部として実施。</p>	